

創世記11章「神の選ばれた者」

1A バベルの塔 1-9

2A セムの系図 10-26

3A アブラハムの生涯の始まり 27-32

本文

私たちの創世記の学びは 11 章に入ります。私たちはこれまで、神がノアとその家族を大洪水から救われたところを読みました。神はノアに、「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。(9:1)」と言われて、かつてアダムに対して行なわれたように、祝福命令を出しました。人は悪に傾いて水によって滅びたけれども、神はノアによって新たなやり直しを与えてくださいました。

そして 10 章においては、ノアの息子、セム、ハム、ヤペテから出た民族分布がありました。数々の名前が出てきますが、それらは単なる子孫の名前ではなく、そこから出てきた民族を表しています。初めはヤペテ、次にハム、それから最後にセムから出た民族を書き記していますが、その最後に必ず、「氏族ごとに、それぞれの国々の国語があった。(5,20,31 節)」とあります。そして章の最後には、「大洪水の後にこれらから、諸国の民が地上に分かれ出たのであった。(32 節)」とあります。

けれども、ノアから出た子孫ですから、それは一つの民、また一つの国語であるはずですが、民族に分かれ、国語も分かれたのです。どうしてか？その経緯を書いたのが 11 章です。11 章において、人々がシヌアルという地で町を建て、そして天に届く塔まで建てようとしていました。それで神が言葉をばらばらにしました。10 章 8 節以降を見てください、ハムから出てきたニムロデという者がこれらの町を建てたことが書かれています。「10:8-12 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の権力者となった。彼は主のおかげで、力ある獵師になったので、「主のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ。」と言われるようになった。彼の王国の初めは、バベル、エルク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、およびニネベとケラフとの間のレセンを建てた。それは大きな町であった。」彼がシヌアルの地で王国を作り、バベルもその町の一つであることが書かれていますが、これが次から読むバベルのことです。

1A バベルの塔 1-9

11:1 さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。11:2 そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。

今、話したように一つのことば、一つの話し言葉でありました。ところで、今の言語学者は意見が

一致していて、人類は元々は一つの言語を話していたと言います。ヘブル語はアレフから始まり、日本語も「あ」から始まり、英語は A から始まるように、全て同じアルファベットです。

そして東のほうからとありますが、ノアの家族は、その箱舟がアララテ山に留まったので、今のトルコ、アルメニア辺りにいました。そこから、シヌアルの地に移動してきました。シヌアルは、今のイラク南部、バビロンの地です。そこに、「平地」があるとあります。それから「定住した」とあります。ここで主がノアに命じられたことを思い出さないといけません、「地に満ちよ」という祝福命令でした。平地という、住むのに楽なところですよ。そして、定住という、やはり快適さを求めている姿を見ることが出来ます。

11:3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作ってよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。

ここから、人が次第に高慢になって来ている姿を見ることが出来ます。主の御名を呼び求めるのではなく、「私たちは」という主語、自分たちがするという高ぶりが出ています。そして重要なのは、「煉瓦」を使っていること、そして「瀝青」つまりアスファルトを使っていることです。その理由は、洪水の記憶が残っているからでしょう。洪水対策をしています。主が、もう二度とあのようなことはしない、という契約と約束を与えておられるにも関わらず、神に安全と保障を求めるのではなく、自分たちで守ろうとしているのです。

このように、「自分」というものを前に持ってくると、不安が出てきます。自分を捨て神を前に持ってくると、そこには安息があり、安心があります。しかし、神を信じない罪は自分を前面に出し、自分で守ろうとする罪を犯させるのです。

11:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」

彼らは神に反逆する罪を犯しています。初めに「町を建てよう」と言っています。これは先ほど読んだ 10 章 10 節の町バベルのことで、またバビロンのことです。バビロンは「神の門」という意味があります。

そして「頂が天に届く塔」と言っています。これは天における万象を神の領域として取り扱うこと、占星術であります。彼らはこうやって神の領域に入ろうとして、それでこれが初めての偶像礼拝になりました。バビロンが偽りの宗教の発祥地となりました。指導者ニムロデがバビロンの主神マルドクになり、エレミヤ書 50 章 2 節では「メロダク」と呼ばれています。そして「ベル」とも呼ばれています。

そして「イシュタル」という女神があがめられました。性愛の神です。バビロンには「イシュタル」という女神がいました。愛と性の紙です。エジプトには「イシス」、カナン人には「アシュタロテ」、そしてギリシヤは「アフロディテ」そしてローマは「ビーナス」です。エレミヤ書には、「天の女王」として出てきます。では、神道を見てみましょう。天照大神が女神ですね。それから仏教では、創始者仏陀は明らかに男性ですが、それを祭る観音像はなぜか母性的です。そして、「キリスト教」だと言われているカトリックですが、なぜか神の無比の子であられるキリストに、さらにお母さんがいるのです。マリヤは神の母と崇められ、イエスよりもさらに高められます。

このことがとても大事になります。バビロンは、エレミヤの時代にユダの国を滅ぼした大国というだけでなく、バビロンの滅びを預言したイザヤそしてエレミヤが、終わりの日における永遠の滅びを預言しているからです。当時のバビロンだけでなく、その背後にある偽りの霊、偽りの宗教を表しているからです。そして、この姿がキリストの再臨直前に世界を支配している女として登場するのです。「また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れていっぱいになった金の杯を手を持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。(黙示録 17:1-5)」まことの主イエス・キリストを信じないようにさせ、他のものに拠り頼ませるもの、これがバビロンであります。

そして「名をあげよう」とあります。これが、神ではなく人間で治めていこうという、高慢、傲慢の現れです。それが、悪魔が初めにエバを惑わした時の言葉と同じであり、私たちの罪の根本を表しています。高慢というと、私たちは威張っている人のように感じてしまいます。いいえ、そうではありません。「われわれが全地に散らされるといけないから。」とあります。これはノアに対する、「地に満ちよ」を故意に従わないとする、反抗です。神を信頼して、神の言われるように、地に満ちようとするのではなく、その神が自分たちの都合に合わせず、それと反対のことを命じられるので、反発している姿です。自分の快適な空間、これでよいと思っている考えや気持ち、これを神とて不可侵なのだとして、断固介入を拒む姿、これが高慢です。

11:5 そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。

興味深いですね、人間は天にまで届く塔を立てようとしていた者たちに対する皮肉です。自分たちは神の領域に達したと思っていますが、神は降りてこないと見えてこないぐらい、ずっと下にあるということを人間の分かる表現で言い表しておられます。人は自分で最善だと思っている時でさえ、

それが神にとっては「不潔な着物」であると、イザヤ書には書いてあります。

11:6 主は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。11:7 さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。」

一つの民、一つのことばであったから、このようなことをしたのだ、と主は言われます。これが神が言葉をばらばらにし、民族を分けた理由です。そして、7 節ですが、「降りて行って」の主語は「われわれは」となっています。つまり、主がかつてご自身を、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。(1:26)」「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。(3:22)」と言われました。三位一体の神です。

そして神が言葉を混乱させられます。これであれば、塔を建てるにも意思疎通ができません。町を建てて、そこでいっしょに住むことができません。そこで次です。

11:8 こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。

彼らが主の命令に従わなかったので、主は強いることによって彼らが世界に散るようにされました。地に満ちるのではなく、散って行ったのです。どうでしょうか、これは従順な子供と不従順な子供に似ています。親にしなさいと言われたことを行なえば、そこには安心があるし、親に守られているという中にいることができます。けれども、どうしてもやらなかったら、無理やり同じことをしなければなりません。そこには悲しみが残るだけです。

神は時に、私たちがこれ以上、高慢にならないために、力強い手によって何かをやらせないことがあります。自分にはどうしようもできない不可抗力を与えることによって、その中で主を知って、へりくだるように促されます。言語がばらばらになりました。民族が分かれています。これらは、残念なことであり、そのために意思疎通ができなくなり、民族の違いがあります。けれども、その制限の中で私たちは神を見出すことができます。使徒パウロはアテネでこう語りました。「使徒 17:26-27 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。」

私たちは、このような分かれた状態になっていますが、ここに贖いの希望があります。キリストにあって一つだという希望です。天において、教会が主イエスを賛美しています。「黙示 5:9-10 彼

らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」私たちは、キリストの血によって贖われたというその一点で、どんな民族であっても、神の民となることができます。

2A セムの系図 10-26

10章において、このバベルの塔事件の後の民族が分かれ出た話があります。そこで、ヤペテの子孫、ハムの子孫が書かれていましたが、その後、セムの子孫も書かれていました。10章25節に、セムの子孫エベルの子ペレグの時代に地が分けられたとあり、これを地殻変動と取る人もいますし、言語が分かれたと取る人もいます。そしてエベルのもう一人の子ヨクタンから出てきた息子が書いてありましたが、ペレグの子孫は書かれていません。なぜなら、ペレグから後にキリストが現われるからです。著者モーセは、ペレグ以後の系図を含めて、セムの系図を次に書き記します。

11:10 これはセムの歴史である。セムは百歳のとき、すなわち大洪水の二年後にアルパクシャデを生んだ。11:11 セムはアルパクシャデを生んで後、五百年生き、息子、娘たちを生んだ。11:12 アルパクシャデは三十五年生きて、シェラフを生んだ。11:13 アルパクシャデはシェラフを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。11:14 シェラフは三十年生きて、エベルを生んだ。11:15 シェラフはエベルを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。11:16 エベルは三十四年生きて、ペレグを生んだ。11:17 エベルはペレグを生んで後、四百三十年生き、息子、娘たちを生んだ。

セムからペレグまでの系図です。その父「エベル」ですが、これが「ヘブル」となり、後にヘブル人と呼ばれるようになります。エベルは、「渡る」という意味ですが、後にアブラハムがユーフラテス川を渡り、カナンの地に來ます。それで、カナン人からは「川向こうから來た民」という意味合いがあったと思います。

11:18 ペレグは三十年生きて、レウを生んだ。11:19 ペレグはレウを生んで後、二百九年生き、息子、娘たちを生んだ。11:20 レウは三十二年生きて、セルグを生んだ。11:21 レウはセルグを生んで後、二百七年生き、息子、娘たちを生んだ。11:22 セルグは三十年生きて、ナホルを生んだ。11:23 セルグはナホルを生んで後、二百年生き、息子、娘たちを生んだ。11:24 ナホルは二十九年生きて、テラを生んだ。11:25 ナホルはテラを生んで後、百十九年生き、息子、娘たちを生んだ。11:26 テラは七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ。

アブラムあるいは、アブラハムに至るまでの系図です。ここから一気にズームインされて、アブラハムの生涯が始まります。ところで、セムからアブラハムにかけて、極端に寿命が短くなりました。

セムは 600 歳、アルパクシャデは 438 歳、エベルは 464 歳、ペレグは 239 歳です。永遠の命を与えられていたアダムですが、罪を犯し、それで 1000 年に満たない寿命でしたが、さらにノアの時代の大洪水によって、その罪の影響がさらに及んだのでしょう。年齢が短いのは、神の怒りの現われであると、モーセが詩篇の中で言っています。「90:10-12 私たちの年齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわずわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」

ところで、アブラハムの父テラですが、その名前前の意味は「月」です。彼は月の神を拝む偶像礼拝者でした。「ヨシュア記 24:2 ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムとナホルとの父テラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。』」このように、偶像礼拝者の家で生まれて、そこから天と地を造られた神の声を聞き、その方に従うというアブラハムの生涯が始まります。

3A アブラハムの生涯の始まり 27-32

11:27 これはテラの歴史である。テラはアブラム、ナホル、ハランを生み、ハランはロトを生んだ。
11:28 ハランはその父テラの存命中、彼の生まれ故郷であるカルデア人のウルで死んだ。11:29 アブラムとナホルは妻をめぐらした。アブラムの妻の名はサライであった。ナホルの妻の名はミルカとあって、ハランの娘であった。ハランはミルカの父で、またイスカの父であった。11:30 サライは不妊の女で、子どもがなかった。

ここから「テラの歴史」、実際にはアブラハムの歴史が始まります。創世記を読めば、世界の創造からここまでは、世界的な出来事が出てきましたね。けれどもそれは 1 章から 11 章までであり、12 章から最後の 50 章までには、非常に小さな、個々人の話にズームアップしています。アブラハム、そしてその子イサク、その子ヤコブ、そしてヤコブの子十二人の一人ヨセフの話で終わります。なぜなら、神がこのアブラハムをして、ご自分の救いの計画を確立されるからです。それは、人類が民族と国々に分かれてしまった今、神はご自分を信じていく民族を新たに造られて、その民族と国を通して他の民族に祝福を与えるというご計画です。この神の民族からキリストを輩出させ、そして他の全て民族に祝福を与えるというものです。神はこれ以上、繰り返すことのない、変更することのない確固とした、無条件の救いの約束をアブラハムに対して与えられます。

ですから、新約聖書はこの人物の名前をもって始めています。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図(マタイ 1:1)」です。そして、終わりの日、新しいエルサレムの中で、アブラハムから出たイスラエル十二部族の名が、その都の門に付けられています(黙示 21:12)。したがって、神が終わりまでアブラハムによってご計画されたことを実行してくださるのです。

そのような偉大な父アブラハムですが、私たちがこの人物から学ばなければいけない原則は「信仰」です。ローマ人への手紙 4 章 12 節に、「私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。」とあります。神から大いなる祝福を受けたアブラハムですが、それは彼の行ないがすぐれていたからではなく、彼が神を信じたからです。その信仰はいったいどういうものなのかを、彼の生涯を模範とすることによって具体的に見えてきます。

それでアブラハムの背景を見てみたいと思いますが、先ほど話しましたように父テラは偶像礼拝者でした。彼の故郷は「カルデア人のウル」とありますが、バベルの塔のある地域です。偶像礼拝が色濃く残っている町でした。具体的には月を神として拝んでいました。次に彼らが滞在するハラシ(カラン)も、月の神への礼拝が盛んだったところでした。それでアブラム、サライ、ミルカの名前も、月の神礼拝の影響があると言われます。テラがその名を付けたからです。このような環境から、神に呼び出されて、どこに行くかも知らない旅を始めたのがアブラハムです。私たちは、「今までキリスト教の環境にいなかったから、私は神やキリストを信じるのは難しい。」と言ってしまいます。けれども、信仰とは周りがそのような環境だから信じるのではなく、むしろそうでない環境から、神が個々人をそれぞれ呼び出されて、その呼びかけに応えるのです。

11:31 テラは、その息子アブラムと、ハラシの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、彼らはカナンの地に行くために、カルデア人のウルからいっしょに出かけた。しかし、彼らはカランまで来て、そこに住みついた。11:32 テラの一生は二百五年であった。テラはカランで死んだ。

実は、この家族共々の旅を始める前に、彼は 12 章 1-3 節にある神の声を聞いていました。12 章 1 節だけをお読みします。「その後、主はアブラムに仰せられた。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。』」「その後」という言葉は原文にはありません。これはむしろ、アブラハムたちがウルの際にいたときに、彼が個人的に神から聞いた言葉です。

ですから彼は「生まれ故郷」を出て、「父の家」を出なければいけません。ところが、彼は確かにウルの際を離れたけれども、父テラを連れて出て行ったのです。神に聞き従っているようで、実は半分しか聞いていなかったのです。私たちも、この間違いをしばしば犯しますね。神が語られていることは分かるのだから、近くにいる人々との関係を切りたくないと思います。家族であったり、親しい友人であったりします。世から強い反対を受けるならばかえって、自分だけで神に従わなければいけないと思いますが、親しい人たちと一緒にいたいと思って、その肉の思いも携えて神に従おうとするのです。アブラハムは初めからこの過ちを犯してしまいました。

そのため、彼らはハラシ(カラン)に滞在しなければならなくなりました。まだ神が示された地に着いていないのに、そこに留まったのです。そこは月の神への礼拝が盛んだったから、テラはさぞか

し気に入ったことでしょう。けれども彼が死にまでアブラハムはそこを離れることができなかつたのです。

神の永遠の救いのご計画を示すために選ばれたアブラハムですが、彼の神への信頼は不完全だったのです。その不完全な彼に対して、神が何ら咎めることなく、むしろ彼をさらに祝福されることによって、アブラハムは神の恵み深さ、大らかさ、慈しみ深さを知ることができました。それで彼は神にさらに信頼することができるようになりました。彼が初めから神を完全に信頼したのではなく、彼の弱さにも関わらず神が良くしてくださったので、アブラハムは神により信頼できるようになったのです。ですから私たちは、初めから完璧になろうと思わなくて良いのです。むしろ、神が示してくださっている真実に応答する、それが信仰であります。